

【Chapter 8】

Integrating the four skills: current and historical perspectives

- ・外国語教授において、言語指導はスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングというようにばらばらに分割されている。
- ・言語教授における現在のアプローチは4技能を統合しようとしている。
- ・統合された言語教授や様々な統合された教授法は **communicative teaching** の結果と関連している。それに関連して、口頭教授法(**audiolingual method**)は革新的であった。

■How the four skills became separated

- ・1940年代初期、アメリカ軍に対して、効果的で、効率がよく、集中的な言語教授が求められた。**Bloomfield(1942)**によって発展した手法に基づき、そのプログラムは幅広い言語において働きかけた。
- ・スピーキング技能が1番だとされる考えが言語教授プログラムにおいて確立した。話し言葉のパターンは、**structure-based** の指導や、リスニング技能の学習と同時に生じる。
- ・読むために、または書くために言語を学ぶことは言語学的分析や教授の焦点ではない。なぜなら、これらのスキルは現実的な使用において学習者に予測されないからである。
- ・言語教授や言語学習に対する構造的、行動的なアプローチは **oral method** や **aural-oral method**、**structural method**、そして1950年代の **audiolingual method** として知られるようになる。

☆**Ellis(1990)**:口頭教授主義はアメリカの手法である。L2のパターンを教えるのに注意を払わず、状況における使用に注意を払うようなイギリスやヨーロッパではあまり有名ではない。

- ・イギリスでは、4技能の分割は方法論としてというよりもむしろ言語教授の実用的な目的と関連がある。
- ・1960年代、外国人労働者や生徒が来たことに伴い、**ELT**におけるイギリスの観点が変化し始めた。それにより、言語はカリキュラム的、方法論的な役割をもつようになる。
→①専門的な職業といった、特定の目的のための英語
②大学生に対する学術的な目的の英語
- ・イギリスでは、構造的というよりもむしろ状況的な言語教授が強調された。
◇**situational approach** : 口頭教授法の実用的な部分で似ている。ここでは特にリスニングとスピーキングが強調される。
- ・現実的な状況(郵便局や病院など)での指導はチャンクの指導に対する背景として働き、文脈的には文法や語彙に関連する。**situational approach** もまたPPPとして知られる教授法のもととなっている。
- ・しかし、1960年代終わりには、**situational method** は相互行為という点で制限されており、言い換えればスピーキングとリスニングはカリキュラムや指導のガイドとなるよう

な明確な方法を提示しないということが言われた。

- 1970年代と1980年代は人間主義的アプローチから言語教授法へと移行していった。
- **communicative competence**(Hymes, 1971,1972)の概念はどのように言語スキルが教えられるべきで、教室内外でどのようにコミュニケーションとして使用されるかといった観点に変化をもたらした。
- **communicative language teaching**(CLT)は学習者が教室内外で十分にコミュニケーションをすることを目標とした言語スキルを教えることにおいて価値がある。例えば、情報を聞いたり、明確化要求をしたり、意味交渉をしたりなどである。
- Canale and Swain(1980)は学習者が獲得すべき3つの言語の枠組みを提唱した。
 - ①communicative competence
 - ②grammatical competence
 - ③sociolinguistic competence

■linguistic and methodological bases for integrating the four skills

- 1970年代初期、研究者の多くが言語スキルの教授は、分離したものとして行うことは出来ないとされていた。

例) :スピーキングとリスニング理解の両方が会話において求められ、ある文脈ではリーディングやリスニング、メモを取ることも会話をする際に同様に必要である。

☆Widdowson(1978):学習者の熟達レベルを上げるために4技能の統合の重要性を説いた。

…すべての言語は談話の形式や特定の社会的文脈において生じることを強調し、さらに、談話に基づいた教授法(**discourse-based teaching**)と同様に4技能の統合を強調した。

- 1980年代と1990年代では、4技能の統合教授やコミュニケーションの教授において洗練(**elaboration and refinement**)が生じた。
- 教室内における十分なコミュニケーションをする機会は限られているため、統合されたコミュニケーション活動が求められる。このような活動の必要性は1980年代の初期から中期にかけて発展した **task-based instruction** のさらなる発展へとつながる。
- 現在では、グループやペアの活動に対してリスニングとスピーキング、リーディングとスピーキングといったように組み合わせる言語訓練を行っている。このような統合された教室活動は言語テープをリスニングする、ゲームをする、インフォメーションギャップ活動をするといった活動も含む。
- これらの活動は学習者がインタラクションや統合された言語使用に従事することを要求する。なぜなら、学習者が共有し、ディスカッションしたり、情報を読んだり考えを出し合うことでグループワークやペアワークを行うことが出来るからである。
- **task-based teaching** は今日最も幅広く受け入れられているモデルであり、現実生活のインタラクションに最も近いと見なされている。

☆Nunan(1989)：効果的な統合された授業(module)はオーセンティックな言語モデルや手本の使用によって特徴付けられており、理解から産出への連続、教室内の言語訓練が現実世界での使用へつながること、そして学習者が言語の規則性を特定して分析することができるような体系的な言語形式が必要である。

- ・統合された指導において、学習者のスキルは生徒の学習の目的に即して教えられ、訓練されるとした。

■Key consideration in integrated language teaching and curricula

◇統合されたスキルの教授の定義：

「リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングを互いに関連づけて教えること」

- ・より複雑で統合されたカリキュラムは言語のスキルを結合する。

例)：指導的な活動はスピーキングやライティングを促進するため、またはスピーキングとライティングの両方を容易にするためにリスニングやリーディングのインプットを一緒にする。

- ・複雑な統合された教授法(text-based の言語インプット教材など)は主題の内容に関して構築されている。

例) 指導の教材の主題が天気や地理などの場合

- 言語はよりフォーマルなものとなる。
- 天気や地理に関する語彙は一般的な天気に関連した用語を含むように制限される。
- 文法の構造は現在形や、副詞節、場所の前置詞を扱う傾向がある。

- ・discourse-based approach は特定の文脈において情報を提示する言語的特徴や社会文化的特徴に焦点を当てるような機会を学習者に与え、談話に焦点をあてた言語教授は幅広いスキルの統合を容易にする。しかし、統合された言語の教授には多くのデメリットがある。

➢一度に単一の言語スキルに集中するようなカリキュラムはより焦点づけられた教授やより集中した学習を可能にする。

➢多くの学習者が4つのマクロスキルに沿って熟達が増える。

例)：英語圏の国に住む L2 学習者は、リーディングやライティングよりもリスニングやスピーキングの方が得意である。逆に EFL 学習者はリスニングやスピーキングよりもリーディングやライティングの方が得意である。

■ Language tests and testing of the four skills

- ・ 1960 年代から 4 技能の分割において言語テストや評価手法は変化していない。
- ・ 1990 年代と 2000 年代初期、ライティング、文法、語彙における統合を示すために修正されてきた。

例)：文法の直接的なテストは省かれ、文法熟達の評価はエッセイテストで行われ、リーディング理解における語彙のテストなど。

- ・ しかし、言語テストの手法やテストのデザインは 4 技能を分割したままである。なぜなら、言語能力を測定するようなより良いモデルは未だに見つかっていないからである。
- ・ 言語テストにおける基礎的な問題は、コミュニケーションに必要なスキルや能力が膨大であるということである。

■ Current perspectives on integrated teaching

- ・ 国際共通語としての英語、または情報や知識の世界中での普及の媒体として英語の拡大にともない、言語学習の実用的な目的は統合された、柔軟な指導の重要性を強調した。
- ・ 世界中の多くの国で、英語学習は社会的、職業上、教育上、専門的な機会を得ることを学習者に可能にするといった目的を持っている。
- ・ 一般的な言語カリキュラムの観点において、リーディング教授はライティングや語彙の指導に関連しており、ライティング教授はリーディングや文法に関連する。そしてスピーキングスキルはリスニングや発音、異文化語用論の教授に関連する。
- ・ コミュニティブで文脈を考慮に入れたものは、**content-based, task-based, text-based, discourse-based, project-based, network-based, technology-based, corpus-based, interaction-based**…などが挙げられる(p.121 参照)
- ・ 言語産出における流暢さと正確さの両方が強調される中で、統合された言語教授や学習は修正され、発展されるべきである。そしてコミュニケーション志向の観点から、外国語指導は深さ(depth)と内容(substance)を欠いているという批判もある。
- ・ 一方で最近、**standards-based** や **outcomes-based** といった言語指導カリキュラムが英語圏の主要な方法となってきた。

■ Conclusion

- ・ 過去数十年の間、学習者が言語能力を獲得するために、教授は言語とコミュニケーションスキルの統合が必要であるという論拠が出てきた。
- ・ 統合的な指導の最も重要な目標は、様々な文脈においてコミュニケーションが求められる学習者の言語熟達を発展させることである。
- ・ 一般的に、スピーキングとライティングの両方におけるコミュニケーションのための言語学習は、談話や言語ストラテジー、社会文化的で相互行為的規範、そして人々のコミュニケーション文化において精通することを含意する。

- ・今日、多くの場合または目的に対して、4技能の分割は統合的指導よりも効果がないということがわかってきている。なぜなら、現実世界においてコミュニケーションは分割した言語スキルだけでは生じないからである。
- ・教室内での指導はゲームやロールプレイ、スキット、問題解決といったペアまたはグループワークに集中している。これらの活動は学習者の熟達を発達させることを目的としたオーセンティックな言語使用を促進するように努める。
- ・統合的言語インプットの重要な目的は、言語獲得を自然に行わせることである。
- ・同時に、教室内でのインタラクションにおける言語に従事することは学習者にコミュニケーション能力を獲得させることを可能にする。
- ・現在の4技能の統合的教授のモデルは学習者の流暢さと正確さの発達を目的としている。
- ・英語は国際的なコミュニケーションの媒体として採用されており、統合的言語教授が様々な教授法において優位を占めるだろうと予測されている。